



鬼女の島



香集夏

僕がその島に流れ着いたのは、
高校の夏休みが始まったばかりの時だった。

仮にその島の名を【鬼女の島】としよう。

砂浜に、島の名前が書いてあるぽい、
石碑の様な物があったが、
見たことない文字で読めなかったのと、
この島には、鬼女が住んでいたからだ。

鬼の年齢は分からないが、
人間で言えば20代後半で、
ちょっと理科の先生に似ている
・・・と言っても知らないよね。
なんて言うか教師顔？

ちょっとキツめだけど、綺麗な顔立ちをしてるから、
男子生徒には人気がありそう、な感じ。

そして、僕がこの島に流れ着く前に、
一組の兄妹が流れ着いていた。

聞くと、兄の方が来年小学校に入学予定だったらしい。

五月に船が転覆して、ここに流れ着いたらしい。

五月に船が転覆？

確か急に渦巻きが発生して、
誰も助からなかったと報道されていた。

「家族と乗ってたの？」

「うん」

兄の方が答えた。

兄の方は、僕の反応から、
家族が死んだことに気づいたらしい。

勘の鋭い子だ。

鬼女は可哀想に思ったのか、兄妹を優しく世話をした。

一見。

ところどころ変なところがあった。

まず、食事には、森で採れたハーブが大量に使われていた。

そして、なにより二人の兄妹の服だ。

蓮の葉で作られていた。

考えすぎだろうか？

ハーブ牛に蓮の葉蒸し。

ハーブを牛の餌に入れると肉が格別に美味しくなる。

蓮の葉で包んで料理を蒸すと、とてもよい香りがつく。

決定的だったのが、

兄妹がお風呂に入っているときの鬼女の一言だ。

「よくあくを抜くんだよ」

あく・・・鍋料理のあくに思えてならない。

僕は、そんなことを感じながらも、

何も知らない風を装い、脱出の機会を伺っていた。

当然、僕も蓮の葉の服を着せられていた。

可愛いワンピースタイプ。男子高校生には辛いです。

そんな日々のある熱帯夜の夜。

鬼女の寝室から泣き声が聞こえてきた。

兄妹は確認済みだから、鬼の泣き声に違いない。

夜泣きは、次の日の夜も、その次の日の夜も続いた。

「鬼の姉さんを、見てきてあげて・・・」

と妹の方が、心配するもんだだから、

仕方なく僕は鬼の寝室へ向かった。

食べられようとしているのに、優しい子だ。

鬼女の寝室の前で聞く鬼女の泣き声と言ったら、
悪霊に取り付かれているんじゃないかと思うほど
「ゴーゴー」と凄まじかった。

僕は勇気を振り絞って鬼女の寝室をノックした。
この僕の勇気は素晴らしい・・・と自画自賛している場合じゃない。
「どうぞ」の声に僕はドアを開けた。
僕がドアを開けると鬼女はさらに号泣した。
地の底から響くような重低音だった。
鬼女は泣きながら言った。

「次の満月の晩に、あの子たちがちょうど熟成して、
美味しさが頂点に達する」

あっ、やっぱり食べる気だ。
それを僕に話して大丈夫なのか？と僕は要らぬ心配をした。
それどころじゃ無いほど、鬼女は取り乱していたのかもしれない。

「これは、先祖伝来の料理の秘伝書、
これに、これに全てが書いてある」

秘伝書には確かに次の満月に美味しさが頂点を向かえる。と書いてある。

「悲しくて、悲しくて・・・あんなに良い子たちなのに、
食べなければならないなんて」

言葉も無かった。

「もうあの子たちと、一緒に暮らせないなんて、
心が引き裂かれそう」

長年続いてきた伝統的食事文化は、
鬼女の思考回路にがっしりとしがみついていた。

「はあー」僕は深呼吸をすると、

出ない言葉を引き絞って言った。

「食べなきゃいい。食べなきゃ一緒に暮らせるよ」

と、もっともな事を言った。

僕の言葉に鬼女止まった。

鬼女の驚いた顔と言ったらまさに鬼。

「その発想は、なかったわ」

鬼女の驚いた顔と言ったらまさに鬼。

仕方ない事かも、今まで人間は食べ物だったのだから・・・

こうして、鬼女と兄妹は仲良く暮らしましたとさ。

兄妹と対照的に、僕は必死で逃げました。

僕は良い子じゃなかったみたいです。

それと、気になったのが

勘の鋭いはずの兄の方は、

食べられる事に気づいていたはずなのに、

なぜ逃げなかったのだろうか？

漂流しているところを助けられ、

無事に新学期を迎えようとしている僕には、

もう確かめるすべはない。

終